

資源管理 WG 委員名簿

2017 年 11 月 13 日現在

【委員】

崎田 裕子	ジャーナリスト・環境カウンセラー NPO 法人持続可能な社会をつくる元気ネット 理事長
杉山 涼子	株式会社杉山・栗原環境事務所 取締役
細田 衛士	慶應義塾大学経済学部 教授
森口 祐一	東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 教授
臼井 万寿雄	東京都オリンピック・パラリンピック準備局 大会施設部 施設調整担当課長
古澤 康夫	東京都環境局資源循環推進部計画課 資源循環推進専門課長

(敬称略、五十音順)

【オブザーバー】

勝野 美江	内閣官房東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会推進本部事務局 参事官
鈴木 弘幸	環境省環境再生・資源循環局総務課リサイクル推進室 室長補佐

(敬称略)



第9回資源管理WGのまとめと今回の論点

大会準備運営第一局 持続可能性部

第9回資源管理WGでいただいたご意見(1/5)

分野	ご意見概要
スケ ジュール	パブコメ等で募った意見を基にWGでも議論を行うようにしていただきたい。
資源管理 の方向性	Zero Wastingという方向性について、より広く伝わる、共感を生み出せるような言葉の使い方、サブタイトル等のつけ方を工夫していくべきである。特に、ポジティブな言葉遣いを意識して考えていくと良いのではないか。
	Zero Wastingという目標を達成するために、様々な参加者が具体的にどのような行動をとるべきか、併せて提示していくべきである。
	Zero Wastingという目標や、目標などについて、日本語をベースに考えたものをそのまま訳しただけでは、海外の人には意味が伝わりづらいのではないか。海外に発信するということを意識して目標を策定すべきである。

第9回資源管理WGでいただいたご意見(2/5)

分野	ご意見概要
資源管理の優先順位(全般)	優先順位の原則を定めることは大切だが、それにこだわって環境負荷を増やすことがないようにすべきである。
	優先順位を考えるときは、循環型社会形成推進基本法の規定にも従い、環境負荷と共にコストや実行可能性も考慮しながら検討していくべきである。
	実務担当者が現場で応用可能な優先順位を示すことが大事である。
資源管理の優先順位(インプット)	再生品と再生可能資源の優先順位は、再生品を優先する方が基本になるのではないか。
	調達コードと「持続可能性が確認されたもの」という表現との相互の優先順位を整理しておく必要がある。特に、木材や農産物等、調達コードで特別ルールが定められた物は注意する必要がある。
	再生品を「繰り返し使う」に分類しているので整理が難しくなっている。リース・レンタル・リユース品を「リユースに配慮したもの」として分類し、再生品と再生可能資源を「リサイクルに配慮したもの」と分類してはいかがか。
	再生可能資源は「減らす」にも「繰り返し使う」にも関係しうる。概念の違う物が同じ三角形の図に入っているので整理が難しいと思われる。再生可能資源は図に入れるべきではないのでは。
	単にコストや資源を削減するだけでなく、持ち帰りたくなるようなデザインのリユースカップやエコバッグ等を考えるといった観点も必要である。

第9回資源管理WGでいただいたご意見(3/5)

分野	ご意見概要
資源管理の優先順位(アウトプット)	リサイクルできるものはリサイクルし、固形燃料化できるものは固形燃料化するという流れが廃棄物の処理では自然なので、その点を明記すべきである。
	リサイクル処理されたものが、最終的にどのような流れでどのような製品になったかということは、廃掃法上最後まで追うことができない。その流れの中で、不正な処理や転売などが行われないようにする必要がある。行政としてもモノの流れをどのように明確化させるかは苦勞しているところがあるが、今回の大会においても、どのように対策するか議論していく必要がある。
	熱回収については、日本は熱回収率が低いという現状があるが、しっかりと熱回収にも取り組むということを示していく必要がある。
	ペットボトルがユニフォームになったり、大会で使った紙がトイレットペーパーになって再び会場で使われるといった、循環経済がきちんと成り立っていることを発信していくことが大事である。

第9回資源管理WGでいただいたご意見(4/5)

分野	ご意見概要
目標群 (全体)	指標の議論をする際には、特に重要な物品、量が多い物品などを抽出したり、可能ならば大まかな数字などを出してもらいたい。
	資源調達に関する要望事項や配慮事項などは、目標とは別の所で、例えば優先順位の中に明記しておけばいいのではないか。
目標群 (個別)	SDGsにおいて、食品は、製造段階の課題、流通の課題、飢餓の課題といった世界が抱える様々な課題の象徴的な位置づけをされている。その意味でも、オリンピックで食品ロス削減を取り上げることが極めて重要である。
	食品ロス削減の定量的な目標設定は難しいのではないか。
	食品ロスは、大会の中で計測することで定量的に把握できればよい。それが今後の参考資料にもなる。
	食品ロス、食品廃棄物という言葉の意味は、英語と日本語で異なるので要注意である。
	リデュースの項目に、食品ロスと容器包装のみが入っているのはバランスがとれていないように感じる。レンタル・リースの量をきちんと把握できるのなら、リデュースについての目標として設定することも考えられる。
	選手村のリユース食器が実現しそうなら、目標に入れることも考えられる。
	運営廃棄物は、多くの人目に触れやすく、また協力しやすい部分である。目標群のバランスを考えると、取り組む主体の多様化を図るなら、運営廃棄物の目標を検討することが考えられる。

第9回資源管理WGでいただいたご意見(5/5)

分野	ご意見概要
目標群 (個別)	「リサイクルしやすい製品の調達」という項目に対応する目標が欲しい。また、PETtoPETのように、何か目玉となるような事例があったらいいのではないか。
	リサイクルしやすい製品の調達について目標に入れる際に、組織委員会が全体として取り組んでいける目標はなかなかないのではないか。
	「環境中への排出の削減」についての目標は、他の目標に取り組んだ結果として現れるため、少し性質が異なる。目標と指標の関係について整理する中で注意しておく必要がある。
	廃棄物由来だけではなく、物品のカーボンフットプリントも計算してはどうか。
	「廃棄物由来CO2の削減」は、CO2ではなくGHG全体を対象にしたい。また、廃棄物由来の排出を考えると、リサイクルに要するエネルギーを考慮することや、リサイクルによる代替効果を考慮することを要したい。

今回の論点

【前回WGからの継続論点】

- ・ 資源管理の方向性の再提示
- ・ 資源管理のインプットの優先順位の再検討
- ・ 目標群の整理の考え方の再検討

【今回の新たな論点】

- ・ 個別項目毎の方針、目標指標の考え方、具体的な取組の考え方など
（目標群で示した項目について、次回WGにわたって継続的検討）
- ・ ISO20121規格に準拠したマネジメントシステムの導入について（説明）

資源管理WGスケジュール

日程	議事内容
第9回資源管理WG 10月27日（金） 9:30～11:30（前回）	<ul style="list-style-type: none">・ 東京2020大会の資源管理の全体像と方向性・ 資源活用の取り組みの優先順位の考え方・ 目標群として設定する項目の確認
第10回資源管理WG 11月13日（月） 9:30～11:30（今回）	<ul style="list-style-type: none">・ 資源管理の方向性の再提示・ 資源管理のインプットの優先順位の再検討・ 目標群の整理の考え方の再検討・ 個別項目の方針、指標の考え方、具体的な取組の考え方に関する検討①・ ISO20121規格に準拠したマネジメントシステムの導入について（説明）
第11回資源管理WG 11月29日（水） 時間調整中（次回）	<ul style="list-style-type: none">・ 第10回WGの積み残し・ 個別項目の方針、指標の考え方、具体的な取組の考え方に関する検討② （第10回WGで検討できなかった項目を中心に）



第10回資源管理WG資料
資源管理分野の目標設定のあり方について

2017年11月13日
大会準備運営第一局 持続可能性部

前回WGの議論を基に、以下の3点について検討する。

1. 資源管理の方向性
2. 資源活用の対策の優先順位と取り組みの整理
3. 目標群の設定のあり方

1. 資源管理の方向性

目指すべき方向性：Zero Wasting

➡ ・より伝わりやすく、共感を得られる文言へのブラッシュアップが必要

資源管理に関する大会において求められる視点(案)

- ・ **資源効率の最大化**

大会の準備・運営のあらゆる側面において資源をムダにしない

- ・ **資源循環の確保**

どのような資材・物品を調達するかを含めたライフサイクルの視点で、資源を循環的に利用する

- ・ **資源循環に向けた協働の推進**

これらの取組みを実践し、アスリートや観客だけでなく世界の人々と共有する

資源をムダなく活用し、資源採取による荒廃や、廃棄による環境負荷を防ぐ、持続可能な社会を大会を通じて実践し、共有する

資源を一切ムダにしない “Zero Wasting Resource Use”

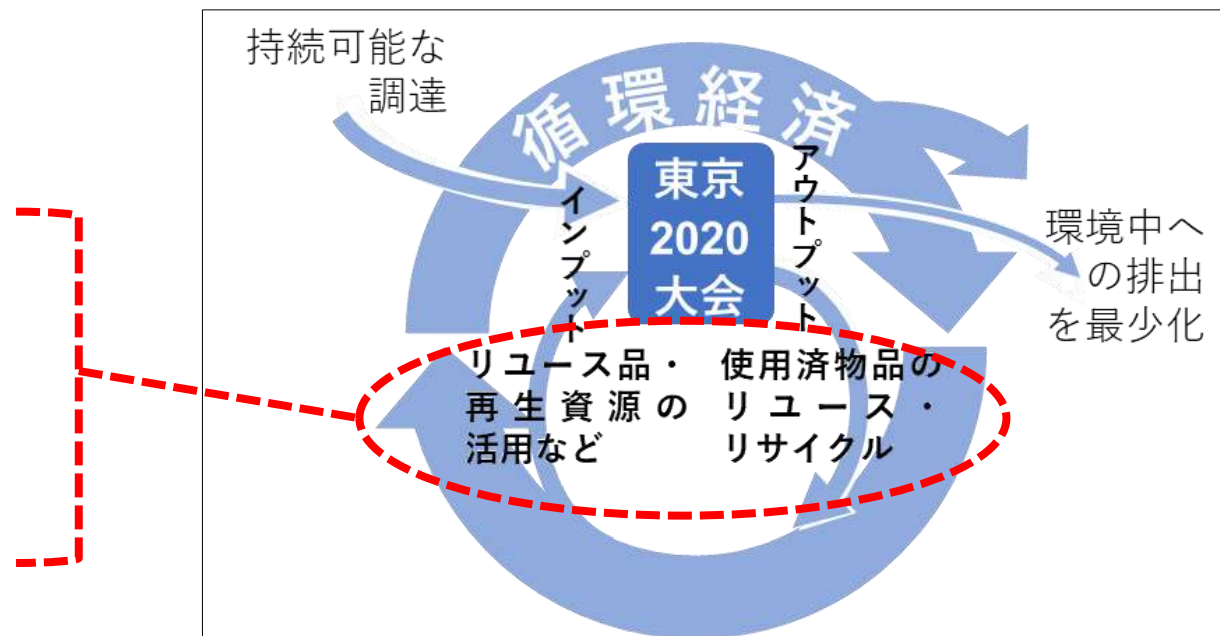
2. 資源活用の方策の優先順位と取り組みの整理

【課題】

- ・ 資源管理の方向性と、具体的取り組みをどう関係させるか



- ・ 資源管理のフローの中で、どのような順番で対策を検討すべきか設定
- ・ それぞれの対策には、どのような取り組みが含まれるのか検討する



2-1. 東京大会における資源活用の優先順位

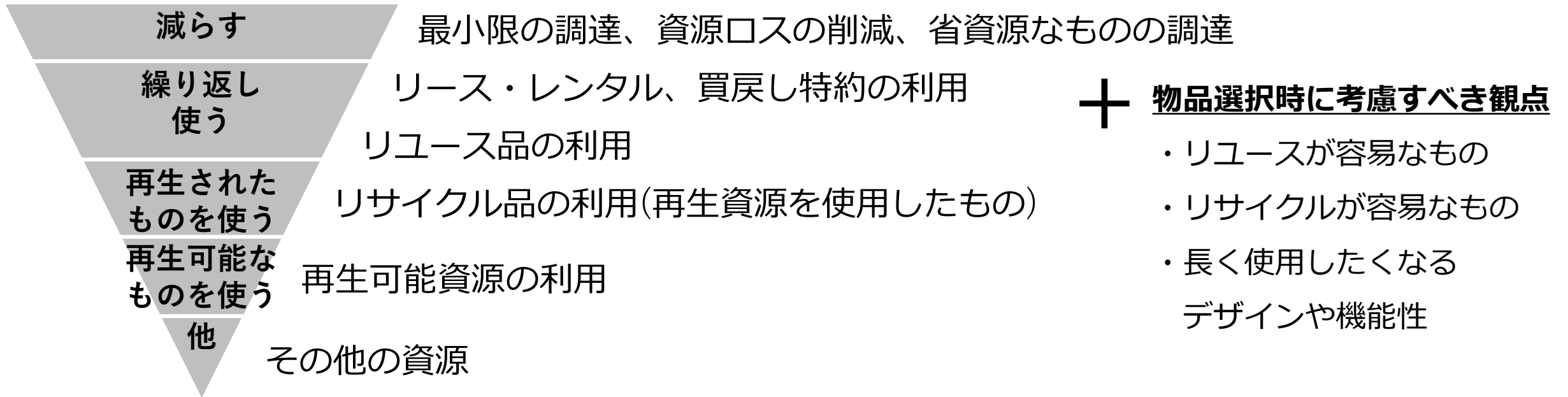
【ポイント】

- ・ インプット・アウトプット両方の側面での資源管理
- ・ 資源の調達から環境中への排出に至る全側面における、持続可能性への影響の最少化
 - * インプット段階とアウトプット段階の対策の優先順位を定め、インプット段階から廃棄物削減を目指すことを明示
 - * 優先順位の適用に当たっては、
 - ・ 環境影響
 - ・ コスト
 - ・ 実行可能性 を考慮する必要

・ 資源管理の方向性を踏まえ、資源活用の対策の優先順位のあり方を議論いただきたい

2-2. 資源の効率的活用に向けた取り組みの優先順位の考え方

インプット側(物品の調達) * 「持続可能性に配慮した調達コード」を順守した物品調達を前提とする

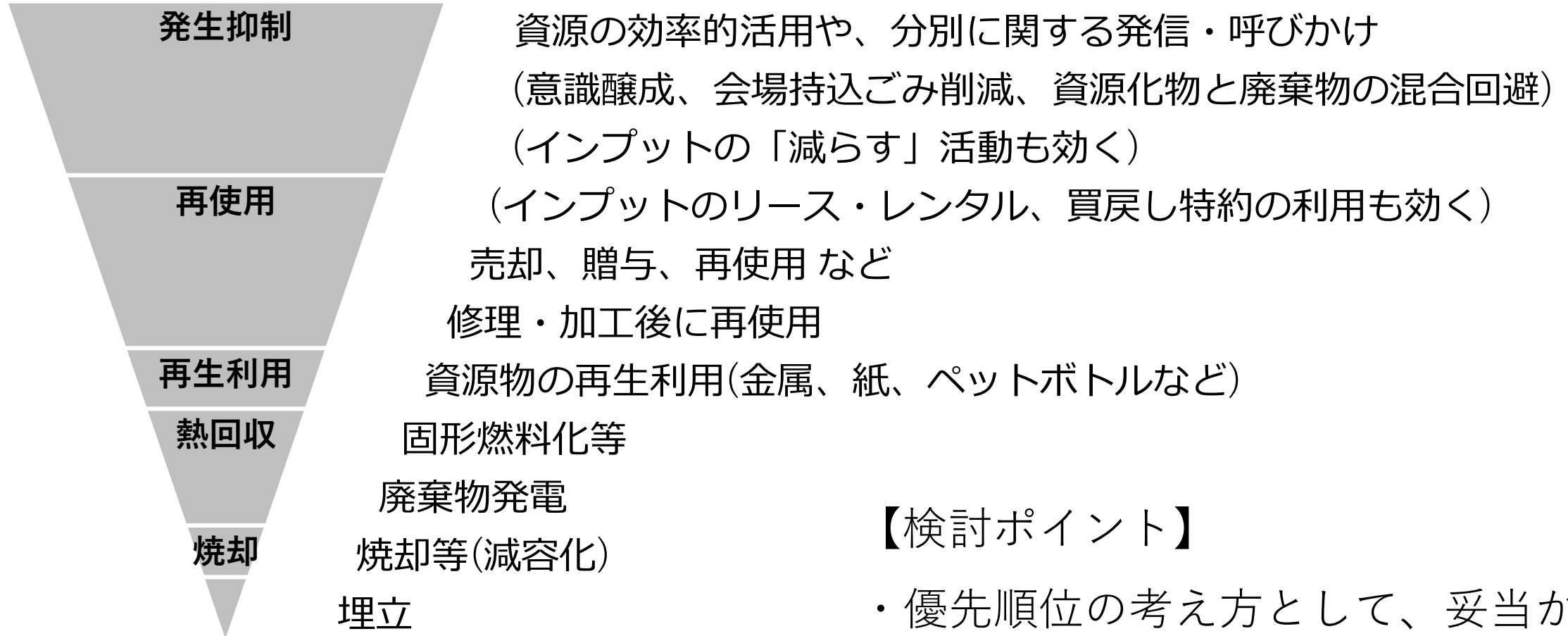


【検討ポイント】

- ・優先順位の考え方として、妥当か

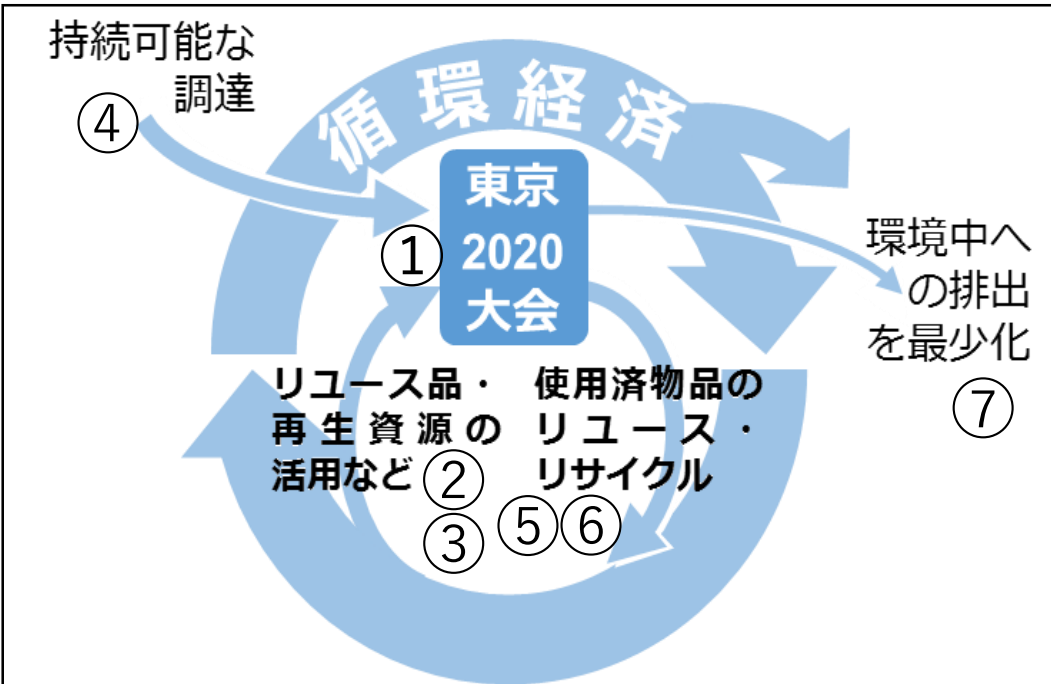
2-2.資源の効率的活用に向けた取り組みの優先順位の考え方

アウトプット側



3. 目標群の設定のあり方

・前回までの議論で、大会における資源利用として、以下の7つの視点があることを示してきた。

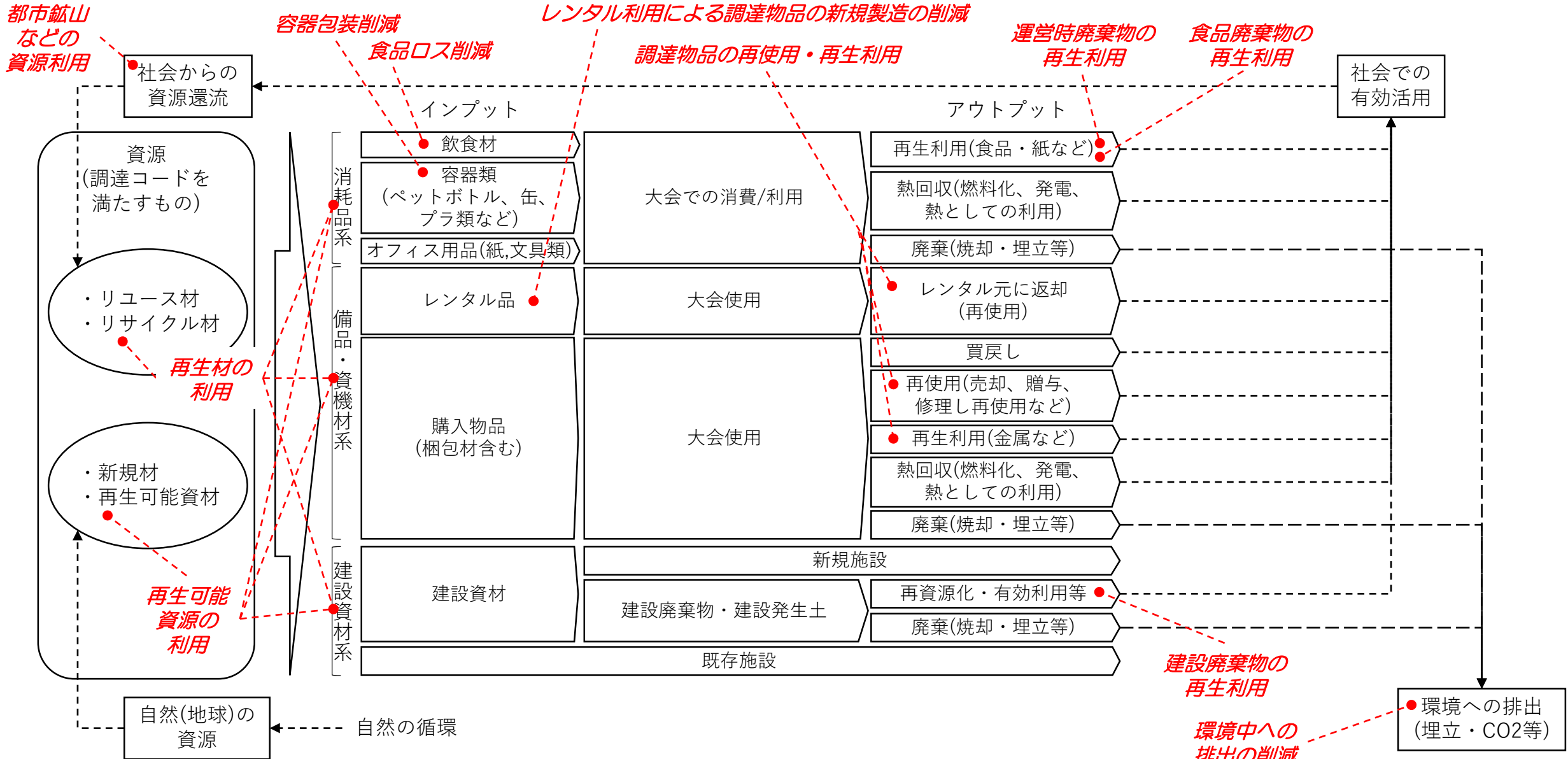


	目標の目的・視点	
	インプット側	アウトプット側
リデュース	①リデュース、資源の無駄の最少化	
リユース	②後利用に配慮した調達 リユース品の調達	⑤使用済み物品等のリユース
リサイクル	③リサイクルしやすい製品の調達 リサイクル品の調達	⑥使用済み物品等のリサイクル
地球環境保全の側面	④持続可能な資源管理	⑦環境中への排出の最少化

この視点から、大会に関わる資源の主要な流れをとらえた。

3-1. 大会に関わる資源の主要な流れと目標設定の関連

*ボックスの大きさで、量感を表しているものではない(別紙参照)
 *エネルギー資源については図示していない



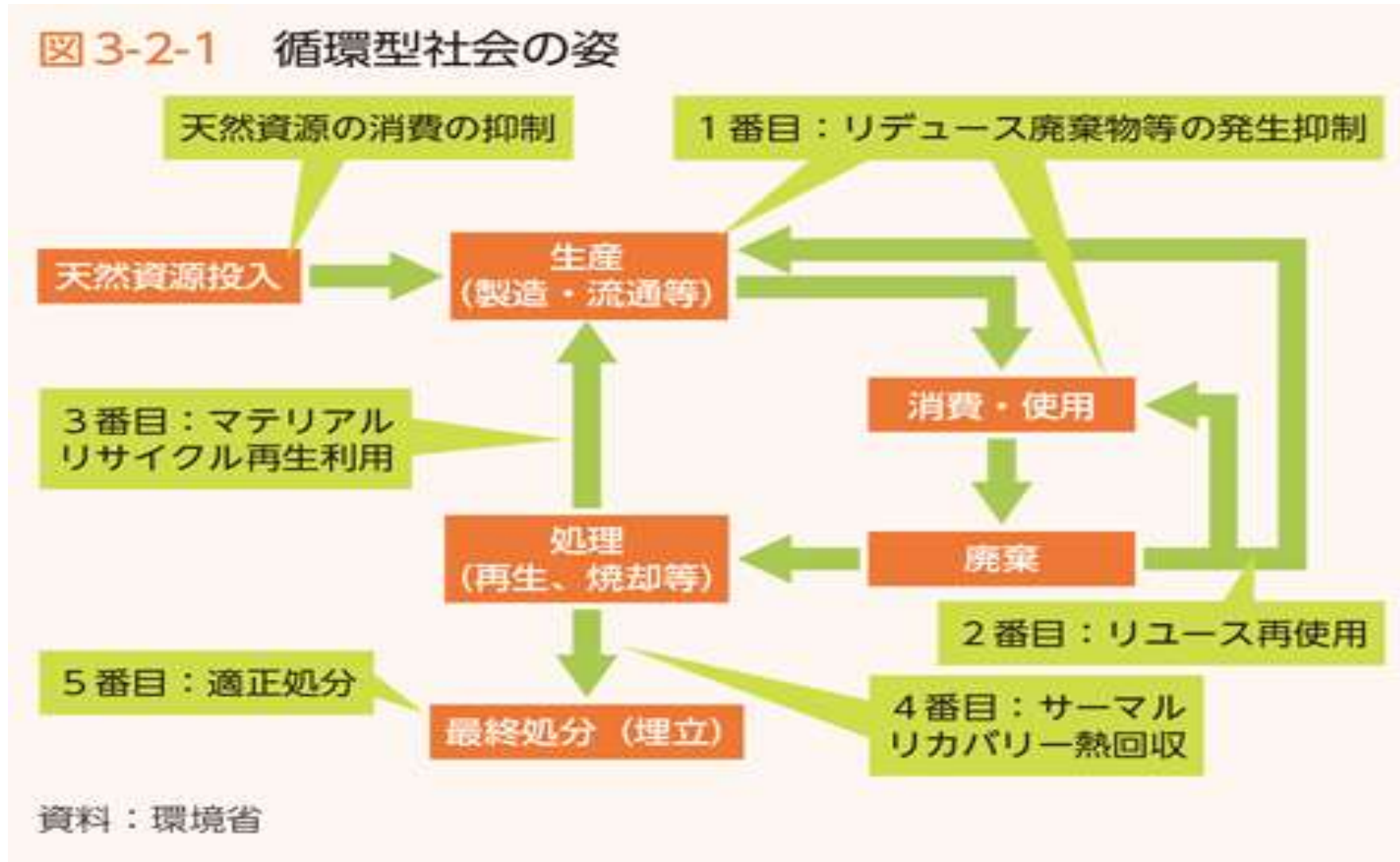
目標として重要な項目は概ね網羅

3-2. 大会に関わる目標設定案

大会に関わる資源の流れに基づき、大会の主要な資源管理の事項をカバーする下記目標群の設定でよいか

	目標の目的・視点		目標候補	
	インプット側	アウトプット側	インプット側 (例)	アウトプット側 (例)
リデュース	リデュース、資源の無駄の最少化		1. 食品ロス削減（食品廃棄物の発生抑制） 2. 容器包装等削減 3. 調達物品のレンタル活用による新規物品製造削減	
リユース	後利用に配慮した調達 リユース品の調達	使用済み物品等の リユース	3. 調達物品の再使用(レンタル等含む)・再生利用	
リサイクル	リサイクルしやすい 製品の調達 リサイクル品の調達	使用済み物品等の リサイクル	4. 再生材の利用 5. 入賞メダルへの再生 金属利用	7. 運営時廃棄物の再使 用・再生利用 8. 食品廃棄物の再生利用 9. 建設廃棄物の再使用・ 再生利用
地球環境 保全の 側面	持続可能な資源管理	環境中への排出の最少 化	6. 再生可能資源の持続可 能な利用 (木材等)	10. 環境中への排出の削減 (埋立処分量、廃棄物由 来CO2等の削減)

(参考) 循環型社会形成推進基本法の考え方



出典：『平成26年版 環境・循環型社会・生物多様性白書』



TOKYO 2020



TOKYO 2020
PARALYMPIC GAMES





第10回資源管理WG資料
個別項目の目標指標の考え方について

2017年11月13日
大会準備運営第一局 持続可能性部

資源管理における目標群(案)

	目標の目的・視点		目標候補	
	インプット側	アウトプット側	インプット側 (例)	アウトプット側 (例)
リデュース	リデュース、資源の無駄の最少化		1. 食品ロス削減（食品廃棄物の発生抑制） 2. 容器包装等削減 3. 調達物品のレンタル活用による新規物品製造削減	
リユース	後利用に配慮した調達 リユース品の調達	使用済み物品等の リユース	3. 調達物品の再使用(レンタル等含む)・再生利用	
リサイクル	リサイクルしやすい 製品の調達 リサイクル品の調達	使用済み物品等の リサイクル	4. 再生材の利用 5. 入賞メダルへの再生 金属利用	7. 運営時廃棄物の再使 用・再生利用 8. 食品廃棄物の再生利用 9. 建設廃棄物の再使用・ 再生利用
地球環境 保全の 側面	持続可能な資源管理	環境中への排出の最少 化	6. 再生可能資源の持続可 能な利用 (木材等)	10. 環境中への排出の削減 (埋立処分量、廃棄物由 来CO2等の削減)

今回は、赤字で示した上記3項目の目標指標のあり方を検討いただきたい

「3. 調達物品の再使用（レンタル等含む）・再生利用率」の関連情報

区分		指標
大会 関連	ロンドン大会の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・会場の設営及び撤去作業から生じる資材の90%以上を再使用または再資源化できるよう妥当な策を講じる ・Temporary overlayについて、資材と製品の80%がレンタル市場やオフサイトの恒久施設でリユースされる ・運営から発生する廃棄物リユース・リサイクル率70%（運営時廃棄物を含む）
	ロンドン大会の実績	<ul style="list-style-type: none"> ・会場の設営・撤去に伴う廃棄物(什器、テクノロジー用品、ルックなどを含む)：99%以上リユース・リサイクル ・Temporary overlay(Commodity)：86%がレンタルされた。 ・運営から発生する廃棄物リユース・リサイクル率62%（運営時廃棄物を含む）
	リオ大会の目標・実績	<p>持続可能性に関する指針を物品購入時の要件に組み込む。（数値目標なし） 実績は、公表されている情報なし</p>
	東京大会運営計画第1版での記載	<ul style="list-style-type: none"> ・物品調達等におけるリース・レンタル品の活用で、リユースの推進を図る。 ・東京2020大会で活用した物品等で記念品となり得るものについては、できる限り使用後に寄付、展示等で活用する
関連するSDGs		12-2.2030年までに天然資源の持続可能な管理及び効率的な利用を達成する。
東京都施策		「「持続可能な資源利用」に向けた取組方針」
他の事例		愛・地球博：目標に、可能なものはリース・レンタル用品を導入すると記載。パビリオンの建築資材にリース材を活用したり、管理施設やトイレなどをリース・レンタル品にするなどした。

「3. 調達物品の再使用・再生利用率」におけるTarget等の考え方

Target (目標案)	Indicator (指標案)	
<p>< 定量 ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 調達物品の再使用・再生利用率 <p>< 定性 ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 調達物品は、可能な限りレンタル等を活用 ・ 調達段階で戦略的に後利用先を確保し、再使用・再生利用を追求する 	<p>計算法</p>	<p>物品調達時の重量ベースで計算する。</p> $\frac{\text{再使用・再生利用された調達物品の重量}}{\text{調達物品の重量}}$
	<p>分母 (バウンダリ)</p>	<p>組織委が調達する物品 例：仮設設備（プレハブ・テント等） 什器類（机・いす等） セキュリティ備品（フェンス等） オペレーション備品（競技用備品等）</p>
	<p>分子</p>	<p>再使用・再生利用された物品</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 再使用：リース・レンタル、買戻し特約 売却、贈与、再使用 など 修理・加工後に再使用 ・ 再生利用：資源物の再生利用 (金属、紙、ペットボトルなど)

「7. 運営時廃棄物の再利用・再生利用率」 関連情報

区分		指標
大会 関連	ロンドン大会の目標	運営時廃棄物（調達物品のリユース・リサイクルも一部含むと思われる）の最低70%は再利用・リサイクル・堆肥化するよう徹底する
	ロンドン大会の実績	62%を達成した
	リオ大会の目標・実績	大会で出た固形廃棄物について、管理と責任ある処分を行う（数値目標なし） 実績は公表されている情報なし（精査中）
	東京大会運営計画 第1版での記載	分別回収した廃棄物については、CO2排出量の抑制をも念頭に置き適切な処理業者等に委託し再生利用を図る
関連するSDGs		12-5.2030年までに、廃棄物の発生防止、削減、再利用及び再生利用（recycling and reuse）により、廃棄物の発生を大幅に削減する。
東京都施策		東京都資源循環・廃棄物処理計画：再生利用率目標 一廃27%・産廃35%(2020年度)
他の事例		愛・地球博：廃棄物のリサイクル率が56%。ただし、可燃ごみも再生処理（サーマルリサイクル・焼却灰の加工）されたものに加えると、リサイクル率は98%になる。パビリオンの展示品などは、寄贈やオークションなどでリユースした。

「7. 運営時廃棄物の再使用・再生利用率」におけるTarget等の考え方

Target (目標案)	Indicator (指標案)	
<p>< 定量 ></p> <ul style="list-style-type: none"> 運営時廃棄物の再使用・再生利用率 <p>< 定性 ></p> <ul style="list-style-type: none"> 運営時廃棄物を可能な限り再使用・再生利用する。 大会に参加する観客等に廃棄物の分別への協力を呼びかけることで、より多くのステークホルダーの参加を促す。 	<p>計算法</p>	<p>廃棄物として排出される時の重量ベースで計算する</p> $\frac{\text{再使用・再生利用された運営時廃棄物の重量}}{\text{運営時廃棄物の重量}}$
	<p>分母 (バウンダリ)</p>	<p>競技会場・練習会場・選手村・IBC/MPCなどから排出される廃棄物の量 (一廃・産廃両方含む) (組織委員会で把握できる範囲)</p>
	<p>分子</p>	<p>再使用・再生利用されたものの量</p> <p>再使用：リース・レンタル、買戻し特約 売却、贈与、再使用 など 修理・加工後に再使用</p> <p>再生利用：資源物の再生利用 (金属、紙、ペットボトルなど)</p>

「8. 食品廃棄物の再生利用率」 関連情報整理

区分		指標
大会 関連	ロンドン大会の目標	食品廃棄物単独での数値目標なし
	ロンドン大会の実績	食品廃棄物単独での実績は現時点では不明（恐らくコンポスト化）
	リオ大会の目標・実績	公表されている情報なし（精査中）
	東京大会運営計画 第1版での記載	そもそも食品ロスの発生を抑制することが重要であるが、発生してしまった食品廃棄物については、資源化を目指す。
関連するSDGs		12-3.2030年までに、小売り・消費段階での1人あたりの食料の廃棄を半減し、製造・供給チェーン全体での食品ロスを削減する。 12-5.2030年までに、廃棄物の発生防止、削減、再使用及び再生利用（recycling and reuse）により、廃棄物の発生を大幅に削減する。
東京都施策		食品ロスの削減に向けた取組を促進するための様々な事業の実施
他の事例		愛・地球博：運営廃棄物の3Rを目標に掲げているが、食品廃棄物に特化した目標は存在しない。実績として、会場で発生した「生ゴミ」は、一部が会場内でメタン発酵処理、残りは全て会場外の処理施設で堆肥化された。 食品リサイクル法で、2019年度までに外食産業の食品リサイクル率を50%まで引き上げることが目標になっている。

「8. 食品廃棄物の再生利用率」におけるTarget等の考え方

Target (目標案)	Indicator (指標案)	
<p>< 定量 ></p> <ul style="list-style-type: none"> 食品廃棄物の再生利用率 <p>< 定性 ></p> <ul style="list-style-type: none"> 食品廃棄物を可能な限り再生利用する。 運営時に、食品廃棄物をきちんと分別できるような運営を行う。 	<p>計算法</p>	<p>廃棄物として排出される時の重量ベースで計算する。</p> $\left[\frac{\text{再生利用された食品廃棄物の重量}}{\text{食品廃棄物の重量}} \right]$
	<p>分母 (バウンダリ)</p>	<p>組織委員会が直接、食を提供する場所（まずは選手村メインダイニング等を検討）から排出される食品廃棄物の量 (調理くず・未提供食品・食べ残しの総計)</p>
	<p>分子</p>	<p>飼料化・堆肥化・バイオガス化された食品廃棄物の量</p>



TOKYO 2020



TOKYO 2020
PARALYMPIC GAMES





ISO 20121規格に準拠したマネジメントシステムの導入について

本日の報告事項

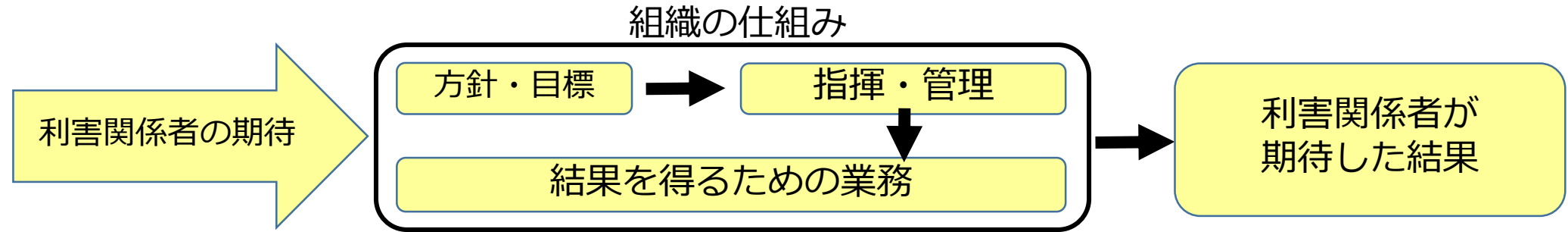
1. ISOマネジメントシステムの概要
2. ISO 20121規格の概要
3. ISO 20121規格の特徴
4. ISO 20121規格の構成
5. ISO 20121規格の骨子
6. 今後の取組
7. ISO 20121規格に基づく方針の策定
8. 今後のスケジュール

【参考】 ISO 20121規格の要求事項（5.2 方針）

1 ISOマネジメントシステムの概要

マネジメントシステムとは、目的を達成するために、方針及び目標を定め、組織を適切に指揮・管理するための仕組みを指す。

これにより、利害関係者が期待する結果（例：高品質の製品や環境負荷の少ないサービス）を得ることを目的としている。



組織を管理する仕組みについて、国際的な基準としてISO(※)が制定した規格が、ISOマネジメントシステムである。一般的な例として以下のISO規格が挙げられる。

(例) 品質マネジメントシステム (ISO9001)

顧客に提供する製品・サービスの品質を継続的に向上させていくことを目的とした規格

環境マネジメントシステム (ISO14001)

環境リスクの低減および環境への貢献を目指す規格

※ISO…International Organization for Standardization (国際標準化機構) の略称。様々な分野の国際的な規格の策定や、国際取引の円滑化等を実施。1947年設立。

2 ISO 20121規格の概要

- ・ 持続可能性に配慮したイベントを運営する組織の仕組みを定めた国際基準
- ・ ロンドン大会に向けて発行された英国規格BS8901を基に2012年に発行

ロンドン大会以降の認証取得状況

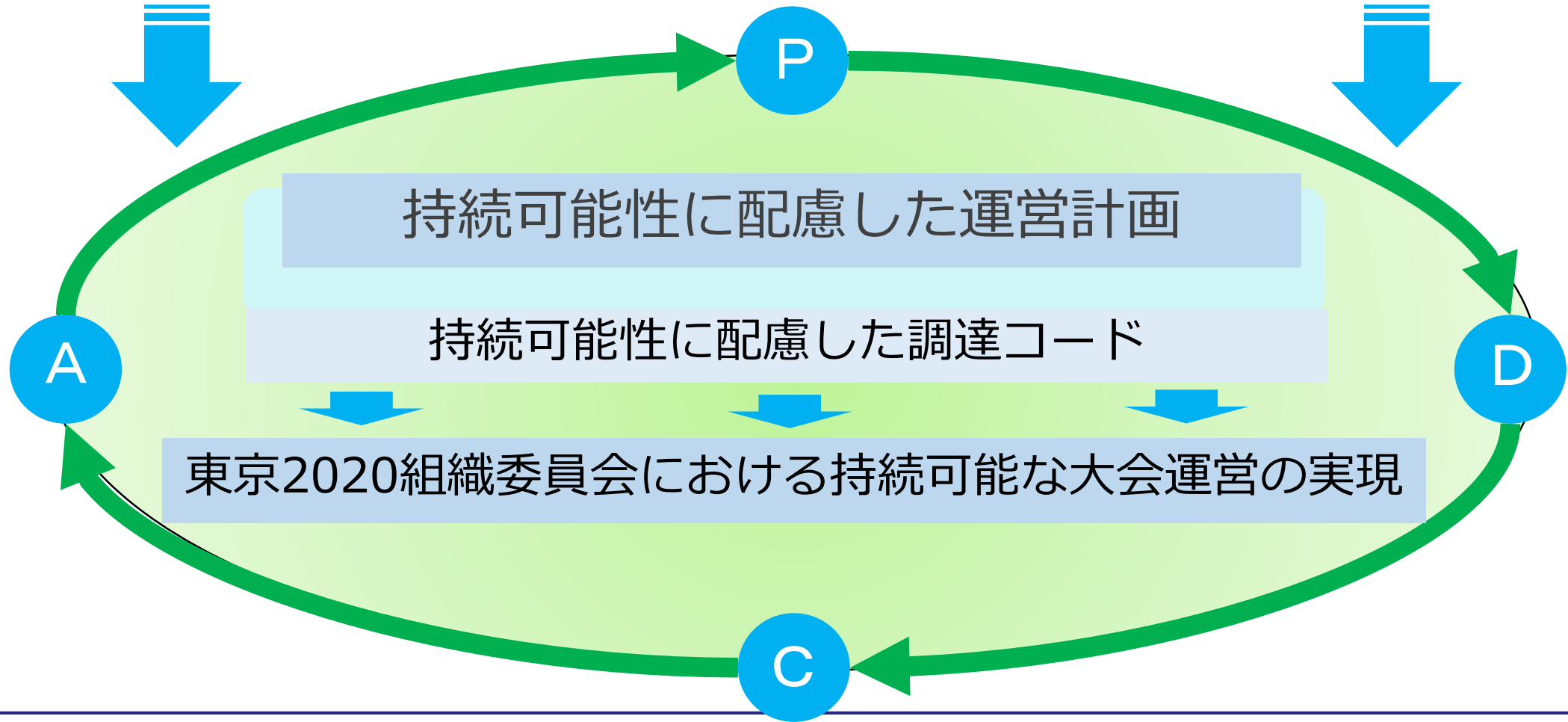
- ・ 2012年ロンドン大会（2012年6月認証取得）
- ・ 2016年リオ大会（2016年1月認証取得）
- ・ 2018年平昌大会（2016年9月認証取得）
- ・ 2024年パリ大会招致委員会（2017年3月認証取得）



東京大会においても、持続可能な大会運営を確実に実施するため、組織委員会においてISO20121の枠組を導入し、マネジメントシステムを運用

2 ISO 20121規格の概要

ISO20121規格の要求事項を踏まえ、PDCAサイクルにより必要な改善を実施



3 規格の特徴

リーダーシップの強化

- ▶ トップマネジメントによるマネジメントの成果の達成への貢献等を規定

ステークホルダーとの連携強化

- ▶ ステークホルダーのニーズ及び期待をマネジメントに反映

ライフサイクルの考慮

- ▶ 課題の特定や組織の活動・サービス等について、ライフサイクル全体を考慮

サプライチェーン管理の強化

- ▶ サプライチェーン全体を考慮し、外部委託するプロセスも含めてマネジメントを実施

成果の重視

- ▶ 取組の監視・測定を行い、成果についての分析・評価を実施

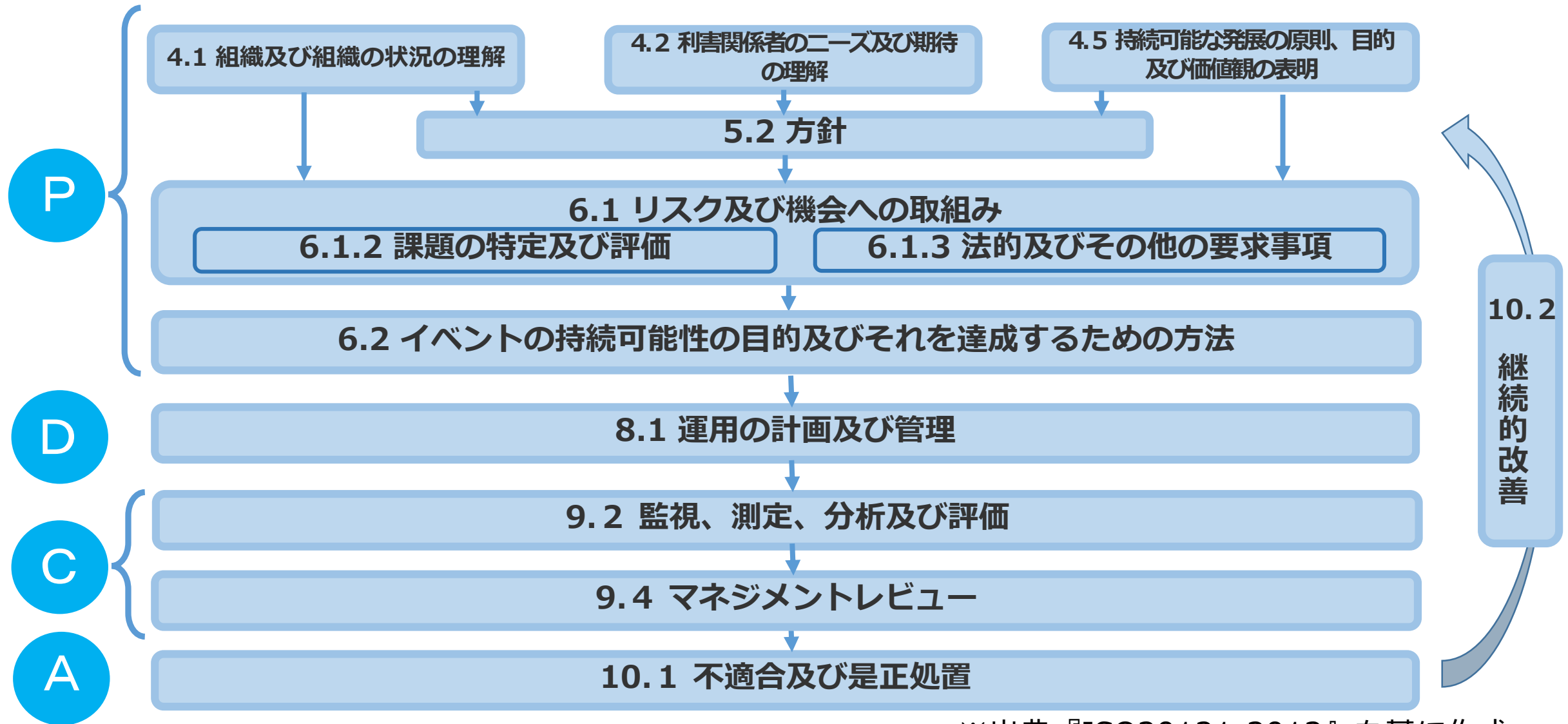
4 ISO 20121規格の構成

項番・内容	
1	適用範囲
2	引用規格
3	用語及び定義
4	組織の状況
4.1	組織及び組織の状況の理解
4.2	利害関係者のニーズ及び期待の理解
4.3	イベントの持続可能性に関するマネジメントシステムの適用範囲の決定
4.4	イベントの持続可能性に関するマネジメントシステム
4.5	持続可能な発展の原則、目的及び価値観の表明
5	リーダーシップ
5.1	リーダーシップ及びコミットメント
5.2	方針
5.3	組織の役割、責任及び権限
6	計画
6.1	リスク及び機会への取組み
6.2	イベントの持続可能性の目的及びそれを達成するための方法
7	支援
7.1	資源
7.2	力量
7.3	自覚
7.4	コミュニケーション
7.5	文書化された情報

項番・内容	
8	運用
8.1	運用の計画及び管理
8.2	修正された活動、製品及びサービスの扱い
8.3	サプライチェーンマネジメント
9	パフォーマンス評価
9.1	持続可能な発展の統治原則に対するパフォーマンス
9.2	監視、測定、分析及び評価
9.3	内部監査
9.4	マネジメントレビュー
10	改善
10.1	不適合及び是正処置
10.2	継続的改善

※出典『ISO20121:2012』を基に作成

5 ISO 20121規格の骨子



※出典『ISO20121:2012』を基に作成

6 今後の取組

ISO 20121規格に沿ったマネジメントシステムの構築

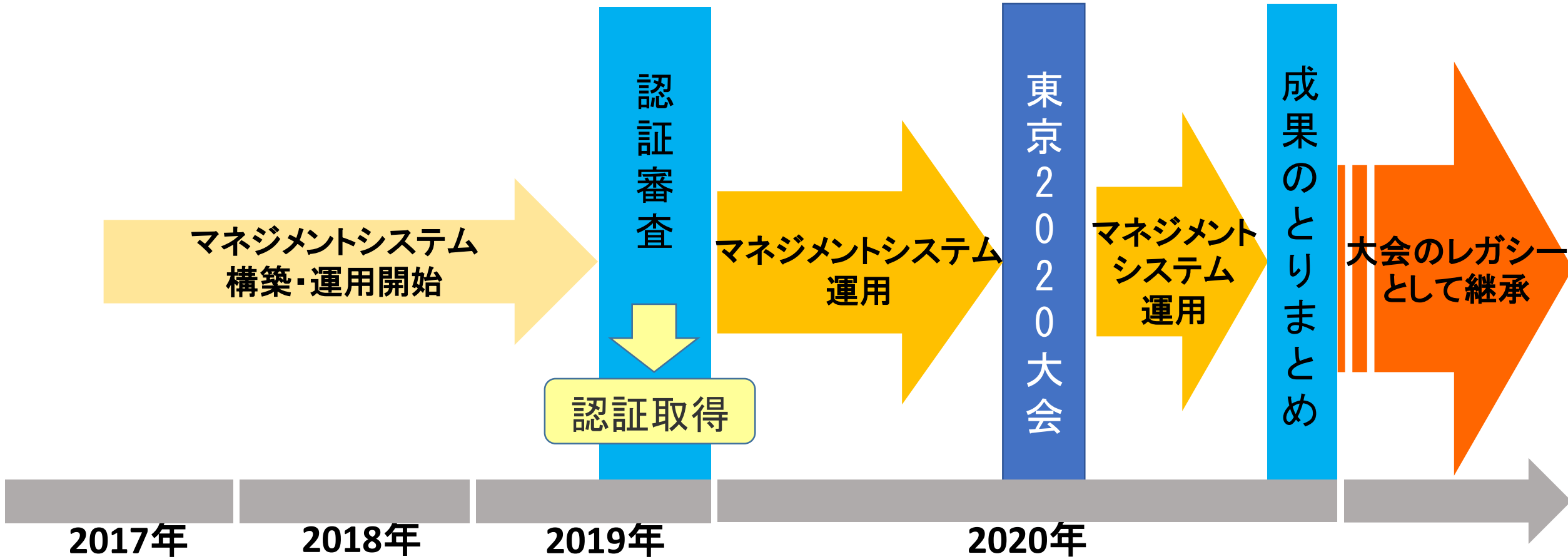
- ISO 20121規格に基づく方針の策定
- イベントの持続可能性の目的及びそれを達成するための方法の決定
⇒ **「持続可能性に配慮した運営計画第二版」**において検討
- マネジメントシステムの運用管理方法の決定
- 監視・測定等の方法、内部監査や不適合の是正措置の手順等の決定
など

7 ISO 20121規格に基づく方針の策定

方針策定の方向性

- 大会開催基本計画、アクション&レガシープラン、持続可能性に配慮した運営計画第二版等の検討状況を踏まえて策定
- ISO 20121規格の要求事項に沿って策定
(【参考】 ISO 20121規格の要求事項 (5.2 方針) 参照)
- 持続可能性に配慮した運営計画第二版の策定に合わせて検討
- 広く一般の方が入手できるようにHP等で公表し、大会における持続可能性の理念を分かりやすく伝えるツールとして活用

8 今後のスケジュール



【参考】ISO20121規格の要求事項（5.2 方針）

5.2.1 持続可能な発展の方針の確立

※出典『ISO20121:2012』を基に作成

トップマネジメントは、次の事項を満たす持続可能な発展の方針を確立すること。

- a) 組織の目的に対して適切である
- b) 持続可能な発展の目的を設定するための枠組みを提供する
- c) 適用される要求事項を満たすことへのコミットメントを含む
- d) ESMSの継続的改善へのコミットメントを含む

持続可能な発展の方針は、次の事項を満たすこと。

- － 文書化された情報として入手できる
- － 組織内に伝達される
- － 必要に応じて、利害関係者が入手できる
- － イベントの持続可能性に関するマネジメントの領域におけるリーダーシップに対するコミットメントを含める
- － 表明された目的及び価値観との関連性
- － 特定された適用範囲内で、持続可能な発展の統治原則への組織コミットメントを含む

【参考】ISO20121規格の要求事項（5.2 方針）

5.2.2 方針情報の文書化

※出典『ISO20121:2012』を基に作成

組織は、方針の情報を文書化して維持すること。

持続可能な発展の方針は、イベントに関連する活動、製品及びサービスの全てに基礎となる考えを示すこと。

持続可能な発展の方針は、次の事項を考慮すること。

- a) サプライチェーン組織（製品、施設・設備、サービス提供者）
- b) イベントマネジメントサイクル、構想、計画から実施、レビュー及びイベント後の活動に至るまでを含む
- c) 利害関係者との関与の結果
- d) エンドユーザーのニーズ
- e) レガシーの課題